

月刊 千葉動力車



最大の正念場を 迎えた

②

なぜスト放棄か

なぜ国労は、2月前段で「ストは構えない」という異例の決定をしたのか。その意図は、JRとの対立を起こす気は一切ないと思われ、「だから政府はJRを和解のテーブルに着けてくれ」ということだ。国労は、橋本政権に依拠した政治決着方針に全面的に舵をきり、そのために、国労側のハードルをすべり取り除こうとしているのだ。

和解の場では？

だが、現在の状況のなかでより重要なことは次の点にある。仮に、この過程でJRが和解のテーブルに着いた場合、事態は当該である一〇四七名の意向と無関係なところで、一気呵成に進みかねないということだ。その場合の解決は、解決ならざるならざるを得ない。

こうした方針決定の背後にあるのは、「解決の流れはできた、自民党をはじめ全政党が解決に向けた努力を表明している、あとは政府の決断だけがポイントだ」という認識だ。

橋本政権は、一〇四七名の闘いをここで終結させなければ大変なことになると判断し、長期債務問題と一括して決着をつけ

ようとしている。また、JR東日本と革マルの異様な結託体制を問題視していることも事実だ。しかし肝心なことは、分割・民営化攻撃の本質は今も何ひとつ変わっていないということであり、第一の敵はあくまでも国労だということだ。

なぜならば、この間の態度表明から言って、国労は、和解の場でJRの不当労働行為を弾劾し、謝罪を求めるということには絶対にならないからである。本来ならば、不当労働行為の謝罪という問題は、和解交渉が具体的な解決水準等の議論に進むかどうかの、最も肝心な前提条件のはずだ。しかし、テーブルすら設定されていない現在の段階で、国労側からこのハードル

を取り外してしまっている以上、その場合は、政府やJRのペースで進む以外ない。

仮に和解のテーブルが設定されれば、一〇四七名問題の行方は、よくて、一旦清算事業団に戻し、そのごく一部を、清算事業団の解散に伴う職員の再就職の一貫としてJRに再就職させ、残りは金銭解決ということしか出てこないであろう。

これでは、闘争団がこの十数年間、不当労働行為の謝罪を求めて、歯を食いしばって闘ってきたことの意味がうち消されてしまうことになる。しかも国労は、一切の闘いを止めて、全ての不当労働行為事件を取り下げるといふ屈辱を強制され、JRはフリーハンドを与えられるということだ。また、屈辱の強要はとめどなく進み、より明確な路線転換の表明、つまり労使共同宣言の締結や連合への加入が迫られることは明らかだ。

今、一〇四七名闘争は、新たな試練をのりこえて勝利への展望を手にすることができるか否か、紙一重の状況にたっている。十年間の闘いの大きな地平という勝利性が一方にあり、主体の側の危機性が他方にある。

なぜこのような

踏みだしてしまったのか。

国鉄分割・民営化攻撃は、20万人の労働者が職場を去らざるをえなかったほど激しい未曾有の攻撃であった。当時現場では、必死の抵抗闘争が組織され、団結を守るための努力がつけられた。国労の組合員は、闘いの方針が提起されるのを、首をながくして待ち続けていた。

また、現場の怒りの声は、86年の修繕時大会で、執行部の「大胆な妥協」方針を覆す画期的な地平をつくりあげ、三万の労働者が国労の旗を守った。しかし国労は、結局この攻撃と一戦も交えることはなかったのである。しかも国労は、なぜ分割・民営化攻撃に一矢も報いることができなかったのかを一度も総括していない。ここには、「最後の民同労働組合」である国労の限界性があらわれていると言わざるを得ない。

「修繕時大会」国労の原点だ」と言われてきたが、その内実は、情勢を真正面から見すえ、明確な路線と組織方針を確立するといふ、労働組合にとって、本来最も重要な課題がすっぽり抜け去っていたのだ。そして運動は、もっぱら、労働委員会や裁判の動向に一喜一憂しつつそれに対応していく、というところに全て集約されてしまった。このような状態のなかで、組合員には、闘いの焦点はどこにあり、誰を敵として設定しようとするのか。

打開すべき課題

とくに、JRとJR総連・革マルとの結託体制を打倒し、国労の組織拡大を実現するという課題を基本にすえて、JR本体から組織をあげた闘いを展開していくことを、国労執行部は放棄してしまっている。

また、日本の労働運動の未来にとって、国労という労働組合が闘いを継続していることのもつ位置がどれほど大きいのかを自覚し、闘う労働運動の再構築をめざしてその先頭にたつという戦略的な路線がない。このような立場にたつて、この十年間を闘いぬいてきたならば、情勢は全く変わっていたはずである。国労は、一〇四七名の仲間たちを先頭にして創りあげた画期的な勝利の地平を自ら貶め、常に自分を嘆願者の位置におしとどめている。そもそも労働運動は、労働者の自己解放性と、現場の団結力に依拠する以外にはなりたないものだ。とくに、分割・民営化攻撃との攻防戦は、一人一人の労働者の生きざまが問われた闘いであった。国労三万の組合員は、例外なくそのような状況のなかで首をかけて国労の旗を守りぬいた組合員である。執行部に問われていたのは、この素晴らしい組合員に展望を示し、勇気を与えて、その持つ力をすべてを引きだすような戦略を練りあげ、方針を提起することではなかったのか。

つていくのかということが、何一つ提示されなかったのである。